子どものごみ減量行動の規定因としての 個人的規範と社会的規範¹

依藤 佳世² (社)国際経済労働研究所

Personal and social norms that determine children's waste reduction behavior

Kayo Yorifuji (*International Economy and Work Research Institute*)

Research has demonstrated the environmentally conscious behavior of parents and caregivers acts as a social influence that produces environmentally conscious behavior in their children, and also has an effect on their children's cost-benefit evaluations and social norm evaluations. The present study examined the personal norms for producing continuous environmentally conscious behavior, and two social norms that form the personal norms, which are categorized as descriptive and subjective norms. The results of this study suggest that the subjective norm formed the personal norm. Furthermore, the parents' normative social influences affected the personal norm through the subjective norm, and the parents' behavior affected their children's environmentally conscious behavior through the descriptive norm.

Key words: 3R behaviors, social norm, personal norm, social influence, children.

The Japanese Journal of Psychology
2011, Vol. 82, No. 3, pp. 240-248

子どもの環境配慮行動の規定因に関する研究は、主に環境教育の分野で行われてきた。その数は豊富とはいえず、行動と態度、それを構成する成分についての分離も行われていない研究も多い。成人については、広瀬 (1994) による態度と行動意図の 2 段階モデルから環境配慮行動を説明した統合モデルが示されている。これを援用し子どもに対して行われた研究では、子どものごみ減量行動の規定因も実行可能性やコスト、社会的規範がより強い規定因となるという結果において、成人の規定因と変わらないと指摘している (依藤・広瀬, 2002)。ただし、子どものごみ減量行動の規定因の特徴としては、ごみ減量をしようという態

度に社会的規範が関わっており、態度の形成に他者からの期待が強い影響を及ぼすことが示されている。ここから子どもの環境配慮行動における社会的規範の果たす役割は大きいと考えられる。

社会的規範について、Cialdini らは記述的規範 (descriptive norm) と命令的規範 (injunctive norm) に分類できることを指摘した (Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990; Reno, Cialdini, & Kallgren, 1993)。記述的規範とは特定の状況においてほとんどの人がいかに行動するかによって示され、そこでの効果的、あるいは適応的な行動の情報を与えることで行動を動機づける。そして、命令的規範は行為者の準拠する文化の中で承認、または承認されないものを示し、規範的、または反規範的に方向づける社会的制裁と結びつくことで、行動を動機づける。以上のことから、社会的規範について考慮するには二つの視点から捉える必要があるといえる。

ところで、依藤・広瀬 (2002) は合理的行為理論 (Fishbein & Ajzen, 1975) を発展させた研究であるが、この研究では、合理的行為理論における主観的規範をモデルに組み込み社会規範評価として、行動の予測因に設定している。主観的規範とは、ある人にとって重要な他者たちが、その人が当該行動を実行すべきか否かについていかに考えているかを指す。この主観的規

Correspondence concerning this article should be sent to: Kayo Yorifuji, International Economy and Work Research Institute, Osaka Prefectural Labor Center, Kitahama-higashi, Chuo-ku, Osaka 540-0031, Japan (e-mail: yorifuji@iewri.or.jp)

¹ 本論文は日本社会心理学会第 45 回大会, The 28th International Congress of Psychology で発表されたものを、加筆修正したものである。

² 本研究および執筆に際し、名古屋大学大学院環境学研究科教授 (現関西大学社会安全学部教授) 広瀬 幸雄先生にご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。本調査にご協力いただいた児童、保護者の皆様に記してお礼を申し上げます。また質問紙改訂にご助言いただいた佐藤 利行先生にも厚く御礼申し上げます。

範について、Ajzen は“命令的 (injunctive) な性格を持つ”と述べており、先行研究でも主観的規範と命令的規範は同様のものを指すとされてきた (Corner & McMillan, 1999)。また、本研究で対象とする準拠集団は家族であり、重要な他者として扱うのも家族成員であるため、準拠すべき社会と重要な他者が一致している。よって、本研究では主観的規範と命令的規範を同義として扱い、以後主観的規範として述べる。

以上から、社会的規範について捉える際には、記述的規範、主観的規範の二つの角度から検討する必要があるが指摘された。ただし、子どものごみ減量行動においてこれら二つの規範を分類して捉える必要があるか、またその機能的差異について明らかにする必要があるだろう。

環境配慮行動の規定因としての個人的規範

環境配慮行動において社会的規範が大きな影響を及ぼすことは上述の通りである。しかし、社会的規範によってのみ制御される行動は外発的・他律的なものといえる。社会的規範が存在しない状況では、人が環境配慮行動を選択しない可能性がある。ゆえに、自律的な行動統制要因と行動との関連を確認し、それにアプローチしていくことで環境配慮行動を育てていく必要がある。そこで本研究で着目するのが個人的規範である。

個人的規範とは、愛他的行動を説明するために Schwartz (1977) により提唱された概念で、自己概念と結びついた制裁を与える倫理的義務感 (feeling of moral obligation) である。社会的規範との違いは、一つには制裁の所在とそれによりもたらされるものであるとされている。個人的規範の場合は制裁を発動するのは自分であり、個人的規範に沿った行動をとった場合には自尊心の高揚などが起こる。一方、社会的規範では制裁は社会によって与えられ、社会的規範に沿った行動を行うと賞賛などがもたらされる。もう一つの違いは当該規範が誰に共有されているかで、個人的規範は各個人により異なり、社会的規範は集団に共有されているとした。

骨髄提供行動から始まった個人的規範の研究は、ごみ焼き行動への応用 (Van Liere & Dunlap, 1978) から、近年特にヨーロッパを中心に環境配慮行動の規定因モデルとして援用する動きが多い (Bratt, 1999; Hunecke, Blöbaum, Matthies, & Höger, 2001; Widegren, 1998)。これらは、いずれも個人的規範が有用な予測因として働くことを示している。

環境配慮行動の重要な規定因である社会的規範と個人的規範の関係が深いことを、Schwartz (1977) は、個人的規範の形成過程の説明において言及している。人は、自己期待を引き出した過去の経験から発展し、内容特定の規範を持つようになるとしており、これ

が個人的規範に当たる。“内容特定の規範”は、学習者を自分の望ましさに一致させることを望んでいる重要な、あるいは強力な他者との相互作用を通じて学ばれるとされている。“重要な他者が、自分の望ましさに学習者を一致させようとする相互作用”とは、2種類の社会的規範に照らし合わせれば、主観的規範に当たると考えられる。ここから、個人的規範と主観的規範の間には強い関連が予想される。

親の社会的影響と子どもの環境配慮行動

発達心理学の多くの研究から示されるように、おもむね児童期までの主な社会化の担い手は親を中心とした家族である。その中でも親の影響は重大であり、小学生高学年までの一番重要な他者として挙げられている (Bower, 1979 鯨岡 1982)。親 (保護者を含む) の社会的影響が子どもの環境配慮行動に及ぼす影響を依藤 (2003) は三つに区分した。まず、環境配慮行動に関する“情報提供”、“注意・賞賛”である。これは Deustch & Gerard (1955) による社会的影響の分類を援用している。事実に関する証拠として参照される“情報的影響”を“情報提供”、周囲の期待に沿おうとする“規範的影響”を“注意・賞賛”とした。そして、社会的学習理論 (Bandura, 1977 原野 1979) から、モデリングが環境配慮行動においても間接的な影響として働くと考え、“親自身の環境配慮行動の呈示 (以下“親の行動呈示”とする)”を示した。この三つの分類に基づき、子どもの認知との関連を検討した結果、“情報提供”は危機感のような環境に関する認知に影響を及ぼし、“注意・賞賛”、“親の行動呈示”は社会的規範やコスト評価といった行動に関する評価に影響を及ぼした。

先述したように、社会的規範に二つの分類があるとすると、“注意・賞賛”と“親の行動呈示”は子どもの社会的規範のうち、どちらに影響を及ぼしたのかを明らかにする必要があるだろう。依藤 (2003) で社会規範評価の尺度として用いられてきた項目は、記述的規範と主観的規範が混在したものであり、どちらに影響を及ぼしたかは言及されていない。“注意・賞賛”については Deustch & Gerard (1955) の定義を借りれば、周囲の期待に沿うような影響であるから、主観的規範に影響していることは明らかである。“親の行動呈示”に関しては、Bandura (1977 原野 1979) によると、モデリングから何を学ぶかについて、強化決定因の影響が必ずあることを指摘し、それは機能的価値や社会的報酬であるとしている。この見解は以下のように解釈可能である。機能的価値を持つということは当該状況において有効な行動を示すということであるから記述的規範といえ、社会的賞賛は準拠集団からの承認であるから主観的規範といえるだろう。すなわち Bandura の見解からはどちらの社会的

規範に対しても、行動の示範は有効であると考えられる。

個人的規範に及ぼす親の社会的影響

ごみ減量行動において、子どもの社会的規範に働きかける親の要因は“注意・賞賛”と“親の行動呈示”であることが確認されている（依藤，2003）。主観的規範と個人的規範の関連は強いことが予想されるため、主観的規範を通じて“注意・賞賛”、“親の行動呈示”はともに個人的規範に影響を及ぼすことが予想される。一方で、個人的規範への直接の影響については、以下のように考えられる。規範的影響による影響は、自己期待、すなわち本研究では主観的規範を媒介すると考えられているため、直接の関連はないと考えられる。また、“親の行動呈示”については、Bandura (1977 原野監訳 1979) では、モデリングは自己強化反応を決定する行動の基準を確立する要因として述べられているが、基準達成やそれを越えた際に喜んだり、水準に達成しない場合には失望するという過程を含むということを述べている。つまり、“親の行動呈示”も評価の背後にある期待を経由して、自己強化に影響する、換言すれば、主観的規範を媒介して個人的規範に影響することが示唆されているため、個人的規範に直接影響しないということが考えられる。

目的と仮説図

本研究では、子どものごみ減量行動を取り上げ、関連する社会的規範と個人的規範の関係を明らかにする。また、それらに及ぼす親の社会的影響を独立に測定し、関連を特定する。同時に、子どもにおける社会的規範の2分類の適用可能性と機能的差異についても検討する。

環境配慮行動をごみ減量行動と限定した理由は家庭

の影響が大きく、子どもに実行可能で、かつ経済的理由のためになされることが少ないためである。

以下に仮説を再度整理する。まず、子どもの認知とごみ減量行動との関連についての仮説を述べる。子どものごみ減量行動の規定因として、個人的規範が十分な説明力を持つ。また、子どもの社会的規範は、記述的規範と主観的規範に分類することが可能で、ごみ減量行動や個人的規範に対する働きが異なる。そして、個人的規範と関連するのは、主観的規範である。

続いて、親からの社会的影響が及ぼす影響についての仮説は以下の通りである。親からの影響のうち、“注意・賞賛”は親からの特定の行動をとるべきだとの期待を生じさせるため、主観的規範に影響を及ぼす。“親の行動呈示”は、行動場面で特定の行動をとるように指し示す働きになるため、記述的規範に影響を及ぼす。同時に、特定の行動をとるべきとの期待に影響すると考えられるので、主観的規範にも影響する可能性がある。

以上の仮説を Figure 1 に示した。ただし、1点検証すべき課題がある。合理的行為理論によれば、主観的規範は行動意図に影響を及ぼす。そこで(1)として示した破線である、主観的規範から行動へのパスを仮定したモデルも検討する。

方 法

調査対象者

調査対象者はN市の小学校に通う小学4年から6年生152名とその親（保護者）とした。N市は2000年からそれまでの可燃・不燃の2分別制から7種類以上のごみ分別回収に移行しており、調査実施時点で3年程度このような分別を行ってきている。また、対象となった小学校は、寮があり、そこでは1人の先生が

Figure 1. Hypothesis of this study.

複数の子どもの面倒を見るという形をとっている。この場合、同一生活圏内で同じ親（保護者）を持つと見なした。

手続き

質問紙法を用いた。学校で配布し、家に持ち帰って回答すること、回答の際に相談はしないこと、回答した質問紙は親の回答とともに同一封筒に入れ、封をして学校に提出することを担任教員を通じて教示した。実施期間は2003年10月7日から10月16日までである。親の回答対象は“家庭で主に家事を担当する人”とした。また兄弟姉妹など同一生活圏内で同じ親を持つ場合は、1組のみ分析対象とした。

調査項目

子ども用質問紙には漢字にふりがなをふり、読めない漢字がないよう配慮した。調査に先立ち、今回調査の対象者でない18名の小学生に面接形式で質問紙を行い、回答困難な項目などを確認した。完成した質問紙は数回にわたり、現役の小学3年生の教師に確認してもらった。ごみ減量行動以外は、“そう思う”から“そう思わない”までの5件法で回答を求めた。

ごみ減量行動 3R (Reuse (再利用), Reduce (発生抑制), Recycle (再生利用) の頭文字をとってこのように呼ばれる代表的なごみ減量行動) 行動に対応する、家庭での行動を尋ねた。具体的には“あなたはプラスチック容器と紙容器が一緒にごみになったとき、分けて捨てますか (以下“分別”とする)”, “あなたはお絵かきや計算用紙に使った紙の裏がまだ白くても捨てますか (以下“再利用”とする; 逆転項目)”, “あなたはお店でいらない袋や包みなどは‘いりません’と言いますか (以下“断る”とする³⁾)”とした。“いつもする”から“ほとんどしない”までの5件法で回答を求めた。

個人的規範 ごみ減量行動に対応する個人的規範3項目を“……しなければならぬと感じる”という形で尋ねた。

社会的規範 記述的規範に関する質問文に参考になるものがなかったため、独自に用意した。記述的規範は、その行動が準拠する社会で実行されているかどうかにより判断される。本研究で準拠する社会とは家族であると考えられるため、“家族の人はすすんで……していると思う”という形で尋ねた。主観的規範については、周囲の期待を本人が期待として感じているかを尋ねた。具体的には“家族の人はあなたに……してほしいと思っているようだ”という形で尋ねた。

親からの影響 以下の項目は親にのみ回答を求めた。“注意・賞賛”は、注意については“お子さんが不要な袋をコンビニなどでもらってきたら注意しますか”, 賞賛については“お子さんがコンビニやスーパーで不要な袋を断ったらほめますか”など各3項目で構成した。“親の行動呈示”は、普段子どもの目の前で行われることが多いごみ減量行動について“コンビニ・スーパーなどで過剰包装を断りますか”など3項目を尋ねた。

結 果

回答者の属性

回収数は142 (93.4%) であった。ただし11の回答は同一生活圏内と識別されたため、有効回答数は131 (86.2%) となった。有効回答のうち尺度として用いる項目に欠損値のないものを分析対象とした。その数は95であり、4年生は29名 (男16名, 女13名, 不明1名), 5年生は27名 (男15名, 女12名), 6年生は36名 (男16名, 女20名, 不明1名) であった (学年性別ともに不明各1名)。学年の構成と男女比に違いは認められなかった ($\chi^2(2) = 1.05, ns$)。

尺度の構成

子どもに尋ねた変数の平均値と標準偏差を、Table 1に示した。ごみ減量行動についてクロンバックの α 係数を求めたところ、-.12となり、行動別に分析することが望ましいと判断した。また、個人的規範は α 係数の結果より潜在変数を仮定して、以下の分析に投入した。

社会的規範の結果と2分類についての検討

記述的規範と主観的規範について分離するか、同一の規範として扱うことが妥当かを検討するため、確認的因子分析を行った。記述的規範および主観的規範を潜在因子とし、確認的因子分析を行ったところ、おおむね分離が可能であるという結果が得られた ($\chi^2(8) = 12.35, ns, GFI = .96, AGFI = .88, CFI = .94, RMSEA = .07$)。両変数の相関は $r = .67$ であった。

しかし、記述的規範は一つの潜在変数として扱うには信頼性が低い。よって、各項目の相関を確認した。その結果、“断る”記述的規範と主観的規範の間に $r = .43$ という中程度の相関が見られた以外は、.30以下の高いとはいえない相関であった。よって、記述的規範と主観的規範は分離可能であることを確認したと同時に、記述的規範を行動ごとに単項目として扱うこととした。

親からの社会的影響

“注意・賞賛”について、親に尋ねた6項目を因子

³ “断る”行動は、Table, Figureでは“reduce”と記載しているが、これは過剰包装を断ることにより、ごみを減らすことになるためにそのように記載した。

Table 1
Mean, SD and α coefficient of waste reduction behavior and cognitions (children)

			<i>M</i>	<i>SD</i>	α
Waste reduction behavior	recycle	Do you separate plastic containers and paper containers when you throw them away ?	4.03	1.19	-.12
	reuse	Do you throw away a piece of paper that was used for drawing or calculating if it has an unused side? (R)	3.70	1.37	
	reduce	Do you say “No, thank you” when you are offered unnecessary bags or packaging?	2.84	1.52	
personal norm	recycle	I feel obligated to separate and throw away empty boxes and plastic wraps of confectionery.	4.45	1.08	.68
	reuse	I should not throw away a piece of paper that has a usable side.	4.41	0.92	
	reduce	I should say “No, thank you” when offered unnecessary bags at the store.	3.86	1.24	
social norm	recycle	I think my family members are all actively involved in separating plastic containers and paper containers.	4.57	0.82	.44
	reuse	I think my family members are all actively involved in reusing paper that has been used only on one side.	3.86	1.27	
	reduce	I think my family members are all actively involved in refusing to unnecessary bags.	3.08	1.49	
	recycle	My family members are expected to separate plastic containers and paper containers.	3.99	1.28	.72
	reuse	My family members are expected to use notebooks efficiently.	3.82	1.29	
	reduce	My family members are expected to refuse to unnecessary bags at the store.	3.04	1.35	

Note. (R) = reverse item.

分析し、解釈可能性から 2 因子解を採用した（最尤法、プロマックス回転）。第 1 因子は賞賛、第 2 因子は注意として、賞賛に関する 3 項目が $M=3.20$ ($SD=1.18$)、 $\alpha=.81$ 、注意に関する 3 項目が $M=2.90$ ($SD=1.11$)、 $\alpha=.61$ となった。また、親のごみ減量行動は子どものごみ減量行動と対応させるため、単項目で扱う。それぞれの平均と標準偏差は、“分別”で $M=4.54$ (.60)、“再利用”で $M=2.97$ (1.33)、“断る”で $M=3.56$ (1.10) であった。

ごみ減量行動に及ぼす社会的規範と個人的規範の影響

まず、子どものごみ減量行動に及ぼす社会的規範と個人的規範の関係を検討した。Amos 4.0.2 for Windows を用い、共分散構造分析を行った。その結果、モデルの適合度は Table 2 の通りであり、すべての行動において採択するに十分な値を得た。いずれの行動でも記述的規範は行動に対して有意な関連を示した。個人的規範については、“分別”行動で有意傾向、“再利用”行動で非有意、“断る”行動で有意な関連が見られた。すなわち各行動で個人的規範の関連に差があることが確認された。また、主観的規範は個人的規

範に対して有意な関連を示した。

また、Figure 1 の(1)の検証として、各モデルに主観的規範から行動へのパスを仮定して分析を行った (Table 2 の model 2)。説明力はほぼ同様で、すべての行動で関連は非有意であった。ただし、このパスを設定することで、“分別”行動では、個人的規範が“分別”行動を高める効果が失われ、一方、“再利用”行動では有意傾向となった。

親からの社会的影響の検討

まず、どのような親が働きかけをしている場合に子どものごみ減量行動が高まるかを確認するため、子どものごみ減量行動と注意、賞賛、親の 3R 行動の相関係数を算出した。その結果、賞賛と“断る”行動 ($r=.21$, $p<.05$)、親の“再利用”行動と子どもの“再利用”行動 ($r=.27$, $p<.01$)、親の“断る”行動と子どもの“断る”行動 ($r=.32$, $p<.01$) との間に有意な相関が認められた。

続いて、子どものごみ減量行動と規範の関連に、親からの社会的影響を加え、検討した。その結果、“分別”、“再利用”については、注意が子どもの主観的規

Table 2
Influence of personal and social norm on waste reduction behavior

model 1 (only SN is determinant of PN)							
	recycle	reuse	reduce	path	recycle	reuse	reduce
χ^2	15.601	18.721	21.497	SN $\rightarrow$ PN	.48***	.44**	.63***
<i>df</i>	17	16	17	DN $\rightarrow$ B	.22*	.40***	.34***
<i>p</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	PN $\rightarrow$ B	.21 [†]	.15	.36***
GFI	0.962	0.955	0.945	SN $\rightarrow$ B	—	—	—
AGFI	0.919	0.899	0.884	SN $\Leftrightarrow$ DN	.32*	.35**	.50***
CFI	1.000	0.985	0.976				
RMSEA	0.000	0.043	0.053				
model 2 (hypothesized relationship between SN and behavior)							
	recycle	reuse	reduce	path	recycle	reuse	reduce
χ^2	14.962	16.422	21.295	SN $\rightarrow$ PN	.48***	.45**	.64***
<i>df</i>	16	15	16	DN $\rightarrow$ B	.20 [†]	.46***	.36***
<i>p</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	<i>ns</i>	PN $\rightarrow$ B	.15	.25 [†]	.40**
GFI	0.963	0.960	0.946	SN $\rightarrow$ B	.11	-.20	-.07
AGFI	0.918	0.903	0.878	SN $\Leftrightarrow$ DN	.32*	.36**	.50***
CFI	1.000	0.992	0.972				
RMSEA	0.000	0.032	0.059				

Note. SN = subjective norm, PN = personal norm, DN = descriptive norm, B = waste reduction behavior.

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

範に、親自身の行動が記述的規範に影響を及ぼしていることが確認された。“断る”行動のみ、親自身の行動が主観的規範と記述的規範双方に影響を及ぼし、“注意・賞賛”のうち、“断る”に関する注意のみが主観的規範に影響を及ぼしていた。

すなわち、“分別”、“再利用”行動では、親からごみ減量行動全般に関する注意を受けることで、ごみ減量行動に関する期待を感じ、親がごみ減量行動を行っている、子どもは親が積極的に行動していることを認知していることが示されている。一方、“断る”行動では、ごみ減量行動全般の注意ではなく、“断る”行動に関する注意のみがごみ減量行動に関する期待を喚起しているが、親の“断る”行動も期待を感じさせる要因として働いていることがわかる。これらの結果は Figure 2 に示した。

考 察

本研究では、(a)子どものごみ減量行動と個人的規範の関係の解明、(b)社会的規範の2類型の機能的差異の検討、(c)個人的規範と主観的規範の関係の解明、(d)親からの社会的影響が子どもの社会的規範に及ぼす影響の検討を行ってきた。以下では順にその結果を考察する。

子どものごみ減量行動と個人的規範の関係

今回の調査の結果から、ごみ減量行動として代表的な3Rのうち、“分別”“再利用”行動では個人的規範の及ぼす影響は相対的に弱く、“断る”行動では有効であることが確認された。これらの相違には二つの理由が考えられる。

一つに今回調査で尋ねた“分別”“再利用”行動は主に家庭内で行われるのに対し、“断る”行動は家庭外で行われる行動である。つまり、家庭内で行われる行動に関しては身近に手本となる親が存在する可能性が高く、記述的規範が有効になりやすい状況であることが指摘できる。一方で、家庭外で行われる行動では必ずしも親は一緒ではなく、記述的規範の利用可能性が低くなる。このような事態では個人的規範が行動に及ぼす影響が強くなると考えられる。

もう一つに、行動の習慣化が考えられる。“分別”行動については、調査対象者が調査までに約3年程度繰り返してきた行動である。また、“再利用”行動については、紙の両面使用ということで、すでに子どもによっては習慣となっている場合があるだろう。各行動の得点も“断る”行動に比べると高い値を示している。このような行動の場合は、やらなければならないという意識よりも、家族がやっているから自分もやるという記述的規範が強く影響して行動に至る、非熟慮

型の行動プロセスをたどる可能性が高いと考えられる。大友 (2004) の言を借りれば、ヒューリスティックに行動が選択されているという良いだろう。

以上より、子どものごみ減量行動における個人的規

範は一定の範囲で効果を持つことが確認された。

社会的規範の 2 類型の機能的差異

本研究では、主観的規範と記述的規範がごみ減量行

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

$\chi^2(83) = 88.960$, ns, GFI = .895, AGFI = .849, CFI = .983, RMSEA = .028

(a) Parent's social influence on children's waste reduction behavior (recycle).

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

$\chi^2(81) = 82.464$, ns, GFI = .895, AGFI = .844, CFI = .996, RMSEA = .014.

(b) Parent's social influence on children's waste reduction behavior (reuse).

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

^{a)} single item.

$\chi^2(80) = 88.048$, ns, GFI = .897, AGFI = .846, CFI = .980, RMSEA = .033

(c) Parent's social influence on children's waste reduction behavior (reduce).

Figure 2. Parent's social influence on children's waste reduction behavior.

動および個人的規範に対して、異なる働きをすることが明らかになった。主観的規範は、個人的規範に影響を及ぼすが、ごみ減量行動に及ぼす影響は非常に弱くなっていた。それに対し、記述的規範は個人的規範には影響を及ぼさず、ごみ減量行動に直接強い関連を持つことが示された。

また、単項目の相関で“分別”、“再利用”では.30以下で、“断る”行動でも.43であり、同一の概念とはいえないことも確認された。子どもにおいても、二つの社会的規範が別個に認知されていることが明らかになった。

このように、子どものごみ減量行動における二つの社会的規範の存在と働きを明らかにすることで、そのメカニズム解明とともに、効果的なアプローチ開発にも貢献するものと考えられる。

個人的規範と主観的規範の関係

仮説通り、主観的規範と個人的規範の間には強い関連が見られた。ここから、個人的規範が主観的規範から成立する可能性が示された。ただ、今回の調査では主観的規範と個人的規範を同時に測定しているため、厳密には主観的規範が個人的規範を形成する社会的規範であるとは断定するのに十分でない。よって、今後は個人パネル調査などを用いて、先に測定した主観的規範が個人的規範に及ぼす効果を検討する必要があるだろう。

親からの社会的影響

親からの“注意・賞賛”ともに主観的規範に影響し、“親の行動呈示”は主観的規範、記述的規範ともに影響を及ぼすという仮説は一部支持されるにとどまった。本研究の結果では、主に、親の注意から主観的規範へのパスと“親の行動呈示”から記述的規範へのパスが確認された。親からの異なる働きかけが異なる社会的規範に影響することが確認されたことは、社会的規範を二つに分類したことによって初めて明らかになったことといえる。

ただし、“断る”については親からの行動についても主観的規範へのパスは有意であった。これについても“断る”行動の性格から考えることが可能である。“断る”行動は先述したように、“分別”や“再利用”行動ほど習慣化しておらず、よって、親の行動の顕現性が高い、すなわち注目すべき行動として子どもに認知され、それが同様の行動をとるようにとの期待に結びついている可能性が考えられる。

また、“分別”行動における R^2 の値は十分に高いといえるものではなかった。これには先に指摘した習慣化の効果があるだろう。項目を測定していないため、明らかでないが、学校教育や友人などの親からの働きかけ以外の要因が影響している可能性も考えられる。

以上のように、子どものごみ減量行動における個人的規範が一定の影響を持つことが示された。同時に、これを形成する社会的規範や親からの影響を同定することができた。

今後は、横断調査を行い、主観的規範が個人的規範を形成する要因であることを確認するとともに、重要な影響源となっている親への働きかけを中心としたアクションリサーチに取り組み、さらに検討を深めることが必要となるだろう。また、総合学習等、学校教育においても環境への取り組みが行われているが、これが子どもに及ぼす影響と、親あるいは友人への波及効果についても、今後明らかにしていくべき課題となるだろう。

引用文献

- Bandura, A. (1977). *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- (バンデュラ, A. 原野 広太郎 (監訳) (1979). 社会的学習理論 金子書房)
- Bower, T. G. R. (1979). *Human development*. San Francisco: W. H. Freeman.
- (パウアー, T. G. R. 鯨岡 峻 (訳) (1982). ヒューマン・ディベロプメント ミネルヴァ書房)
- Bratt, C. (1999). The impact of norms and assumed consequences on recycling behavior. *Environment and Behavior*, **31**, 630-656.
- Cialdini, R. B., Reno, R. R., & Kallgren, C. A. (1990). A focus theory of normative conduct: Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 1015-1026.
- Corner, M., & McMillan, B. (1999). Interaction effects in the theory of planned behavior: Studying cannabis use. *British Journal of Social Psychology*, **38**, 195-222.
- Deutsch, M., & Gerard, H. B. (1955). A study of normative and informational social influences upon individual judgement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 629-636.
- Fishbein, M., & Ajzen, I. (1975). *Belief, attitude, intention and behavior: An introduction to theory and research*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- 広瀬 幸雄 (1994). 環境配慮的行動の規定因について 社会心理学研究, **10**, 44-55.
- (Hirose, Y. (1994). Determinants of environment-conscious behavior. *Japanese Journal of Social Psychology*, **10**, 44-55.)
- Hunecke, M., Blöbaum, A., Matthies, E., & Höger, R. (2001). Responsibility and environment ecological norm orientation and external factors in the domain of travel mode choice behavior. *Environment and Behavior*, **33**, 830-852.
- 大友 章司 (2004). 環境リスク行動の2つの意思決定プロセスと非環境配慮的行為者のイメージが行動

- 決定に及ぼす影響について 環境教育, **13**(2), 25-34.
- (Ohtomo, S. (2004). Dual decision making process of environment-risk behavior and the influence of prototype perception environmentally non conscious person. *Environmental Education*, **13**(2), 25-34.)
- Reno, R. R., Cialdini, R. B., & Kallgren, C. A. (1993). The transsituational influence of social norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 104-112.
- Schwartz, S. H. (1977). Normative influences on altruism. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 10. New York: Academic Press. pp. 221-279.
- Van Liere, K. D., & Dunlap, R. E. (1978). Moral norms and environmental behavior: An application of Schwartz's norm-activation model to yard burning. *Journal of Applied Social Psychology*, **8**, 174-188.
- Widgren, Ö. (1998). The new environmental paradigm and personal norms. *Environment and Behavior*, **30**, 75-100.
- 依藤 佳世 (2003). 子どものごみ減量行動に及ぼす親の社会的影響 廃棄物学会論文誌, **14**, 166-175.
- (Yorifuji, K. (2003). Social influence by parents on children's waste reduction behavior. *Journal of the Japan Society of Waste Management Experts*, **14**, 166-175.)
- 依藤 佳世・広瀬 幸雄 (2002). 子どものごみ減量行動を規定する要因について 環境教育, **12**(1), 26-36.
- (Yorifuji, K., & Hirose, Y. (2002). Determinants of children's waste-reduction behavior. *Environmental Education*, **12**(1), 26-36.)
- 2009. 7. 3 受稿, 2011. 1. 22 受理 ——